mixi ヤンデレコミュ合同誌

http://mixi.jp/view_community.pl?id=464043

十二人の文士と五人の絵師に一人の便利屋が閉鎖仮想空間に浮かぶ一つの病的共同体を鎖として集い更なる病的恋愛を叫ぶ一万一千と百十七の妄執強くされど声無き声を背に近年秋葉原文化が到達した少女人物造形の精華の果てを近年進化したる軽量文芸形態への敬意と繋げ各々が瞑く病みし情熱を以て筆を取り鍵盤を叩き電鼠を駆りて織り上げた怨念乃至は情念溢るる射干玉の如き短編小説漫画歴史集。

有栖山公園　刊

PARKALICEYAMA

包丁のこぎり空鍋病む精神異常ストーカー追掛け生き甲斐死んじゃえあはは取らないで嫉妬ねたみ被害妄想空虚黒化暗黒面永遠鮮血夜這い色仕掛け精神的依存ベタ惚れ壊れていく壊れた暴走病んで三角関係憎悪トラウマ依存精神病戦慄突き飛ばし自殺飛び降り毒盛薬物投与虚言妄想癖心の傷あの■が■んでしまえば精神サイコホラー精神崩壊暗黒化変貌憎悪独占欲 Niceboat 石化見てほしい純粋疑心暗鬼２人きり禁忌肉親愛一途慕う付きまとう寝込み押しかけ破壊■■■悪い虫敵対心嫌い制約信じない私だけ幸せになれないどうしてあいつが返して■すダイスキ■■■■許せない違う現実逃避じゃ私を見て中の人など泥棒猫いらないあの女の匂いが中に誰かなんて貴方を殺して私もだから何も■には無くて払暁の船出をねえ誰も中に誰もいませんてば。

属性yd ［ぞくせいワイディー］

CONTENTS

VOLUME.03

表紙イラスト／まりりん
裏面イラスト／fusou66（前作表紙）
表紙デザイン／維如星

小説・コミック

3 コミックス
スライドショウ
お題：カッター・届かぬ想い
いずみやみその

11 小説
チェイン・メール
お題：依存支配隷属肯定・メール
えふあな

25 小説
猫は月夜に舞い踊る
お題：月・猫
葉月倫

37 小説
姉へ……
お題：姉弟・愛
月読

49 コミックス
黒目がちな少女
お題：愛ゆえのカニバリズム・純愛
ボス

57 小説
ランドセルと懐中時計
お題：妄執・一人電話
霧雨アリス

69 小説
追憶の一万日
お題：姉弟・依存
衛地朱丸

89 小説
ぼくの世界
お題：ごめんなさい・独占欲
めーじゅゆらと

101 小説
なんて素敵なヤンデレラ!!
お題：私じゃだめなの？・ありがとう
利一

127 小説
病みバス最終便
お題：最終バス・ドライバー
漫遊

139 小説
輪環
お題：誕生日・約束
有栖山葡萄

165 小説
幼き日のままに
お題：かくれんぼ・いつも一緒
七曜

177 小説
泪月（おぼろ）
お題：猫・屋上
辛枝

204 コミックス
ヤンデレはじめました
お題：冷蔵庫・盲愛
fusou66

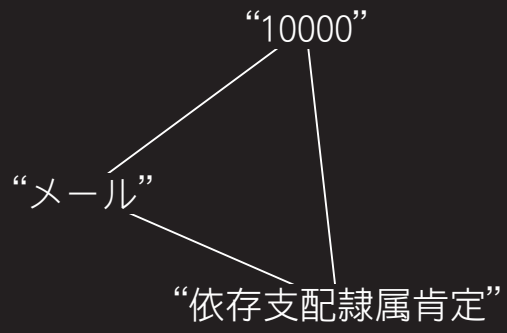
エッセイ＆企画

189 企画
ヤンデレの発見と流行の歴史
a-park

198 おまけ
執筆陣あとがき

スライドショウ
いずみやみその

three-keywords-story
selected from the yandere community



チェイン・メール

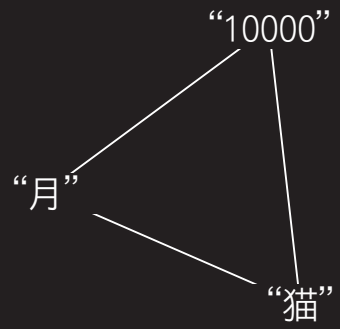
えふあな

藤森綾乃はいつも泣いていた。
瀬野斎はいつも傍にいた。
小動物のような雰囲気を持つ綾乃は、年端も行かぬ子供たちには格好の遊び道具だった。
「ふぇぇ……」
「綾乃！　また何かされたのか？」
斎は綾乃が泣いていると原因を訊き、苛めた相手に仕返しに行くのが日常茶飯事だった。斎はどうにかして綾乃に対する苛めを無くそうと奮闘したが、やりすぎた仕返しをした時には綾乃にたしなめられる事もあった。
「いっちゃん、あんまり酷いことしちゃだめだよ」
「綾乃のほうが酷いことされてるじゃないか」
綾乃は擦り傷を負った斎の頬を撫でる。
「あやはいっちゃんが傍にいてくれればいいの」
斎はその言葉をてっきり綾乃の優しさによるものだと思っていた。しかし斎は知る由もなかった。その時既に綾乃が既に壊れかけていたことに。
そんな日々が続いたある日。
「いっちゃん、今日も仕返ししたの……？」
「もちろんだろ！　先に酷い事されたのは綾乃なんだから」
二人は学校帰りに公園に来ていた。人気のない小さな公園で、二人はブランコに腰掛けていた。陽の傾きかけた公園に、二人の影だけが映し出される。辺りは静かで、きいこ、きいことブランコからの音しか聞こえてこない。しばらくの間無言の時間が続いたが、それは綾乃のほうから壊された。
「……ねぇ、いっちゃんはあやのこと、苛めないよね？」
「何言ってんだよ、そんな事するわけ無いだろ！」
斎は大声を上げる。綾乃にはそんなことを考えているとは思って欲しくないし、無論そんなことを考えたこともない。斎はただ自分の純粋な気持ちから綾乃を守っているのだから。
斎の言葉を受けて、スッと綾乃がブランコから腰を上げる。綾乃は斎の前に立つと、柔らかく微笑みながら言った。
「じゃあ、あやはいっちゃんの『ドレイ』になる」

「斎ー！　綾乃ちゃんが来たわよ！」
母親のがなるような声で俺は目を覚ました。夢を見ていた気がするが、その内容は目覚めた瞬間に忘れてしまっていた。夢の内容を思い出すことの前に時計を確認する。時刻は午前八時過ぎ、家を出なければ学校に遅れてしまう時間だ。
「ったく、こうなる前に起こせっつの……！」

three-keywords-story

selected from the yandere community



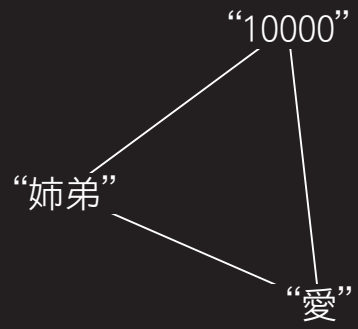
猫は月夜に舞い踊る

葉月倫

猫の寿命は、平均でだいたい十二歳くらいらしい。
十六歳くらいからが長寿で、二十歳を越えると人間で言えば百歳以上の超高齢になる。
とすると、爺ちゃんが「子供の頃からずっと一緒だった」と言っていたこの猫は、人間だといったい何歳くらいになるんだろうか。
爺ちゃんの形見分けとして貰ってきた、爺ちゃんが死ぬ少し前くらいに撮ったという写真に写っている、銀髪の猫を見て首を傾げる。
いや、もちろん爺ちゃんの言葉を信じているわけじゃない。晩年の爺ちゃんはだいぶ惚けが入っていたし、そうで無くても昔から何かと大法螺をふくことで有名だった人だ。
でも、この猫と爺ちゃんの仲の良さだけは本当だったと思う。爺ちゃんの傍らにはいつもこの猫が寄り添っていたし、爺ちゃんも「婆さんの次に愛してる」とこの猫の面倒をみることだけは死ぬ間際まで忘れなかった。
自分も、そんな二人——いや、一人と一匹か——の関係に子供の頃から憧れていた。
爺ちゃんが死んだその日の内に、この猫はいつの間にか姿を消していた。
自分も含め家人が忙しさの隙間を縫って何度か近所を探したが、とうとう見つけることは出来なかった。
爺ちゃんの後を追ったんだろうか。
「猫は三日たてば恩を忘れる、なんて言うけど」
少なくともあの猫に限って言えば、その言葉は当てはまらない、と思う。
「……そんな関係になれるといいな」
膝の上で眠っている黒猫のユキ——雪の日に貰ったから——の背中をそっと撫でながらつぶやく。
にぅ、と小さく鳴いて、ユキはただでさえ丸い背中を更に丸める。
別に自分が死んだら後を追ってくれなどとは思わないが、それくらいの信頼関係を築けたらな、とは思う。
『大切なのは愛情だ！』
爺ちゃんが、酒が入るとよく叫んでいた。
「愛情……愛情ね」
もう一度爺ちゃんと銀の猫が写った写真を見る。
爺ちゃんの膝の上で、ツンとすました顔の銀猫。
お前には理解できていたのか？
人間の、愛情ってやつが、さ。
キーンコーンカーンコーン……
古くさいチャイムの音が校内に響く。
ようやく退屈な基礎課程の講義が終わった。
休憩ルームで缶コーヒーを飲みながら一息つく。次のコマは空きなので何をして時間をつぶそうかなどと考えていると、

three-keywords-story

selected from the yandere community



姉へ……

月読

僕にとって姉は、僕の命以上に大切な人であった。姉は僕の知りうる女性の中で、最も美しい人の一人だ。名を万里子という。

姉は僕よりも、十年早くこの世に生をうけた。物心がついた時から、姉は僕の傍にいた。父と母が共働きだったため、姉が僕の面倒をみていたからだ。姉は僕のクラスにいる女子とは全く違った存在だった。夜のように深くて黒い髪をなびかせ、雪のように白い肌を輝かせていた姉は、まるで別世界の人間のようだった。姉に対してわがままらしいわがままを言わなかったのは姉の神々しい雰囲気に子供ながらに圧倒されたからだ。

僕の一番の楽しみは姉に絵本を読んでもらうことだった。姉の出す流麗な声は、いかなる音楽家でも作ることができないような最高の芸術だった。姉の膝に乗せてもらいながら、姉の声によって彩られる物語を聞く時間は僕にとって何よりもかげがえのない至高の時間だった。

姉は僕にとても優しくしてくれた。姉の大切な存在であることは、僕の生きていく上での喜びだった。姉は僕を守るためにはなんだってしてくれた。

あれは僕が教科書を盗られた時だった。泣きながらそのことを姉に話すと、姉は鬼のような形相になり、教科書を盗った奴のことについて根掘り葉掘り聞いてきた。僕は、そいつの名前、そいつの住所について話した。姉はにっこり笑い、自分に任せてくれと言い、そのまま家を出て行った。数時間後、姉は僕の教科書を持って家に帰った。その時、姉は僕にとって、ただの家族以上の存在になったと思う。

学校の先生も、いつも仕事に忙しい両親も、僕には何もしてくれなかった。彼等を僕の人生の先導者として尊敬することはできなかった。でも、姉は違った。僕に救いの手を差し伸べてくれたのだ。

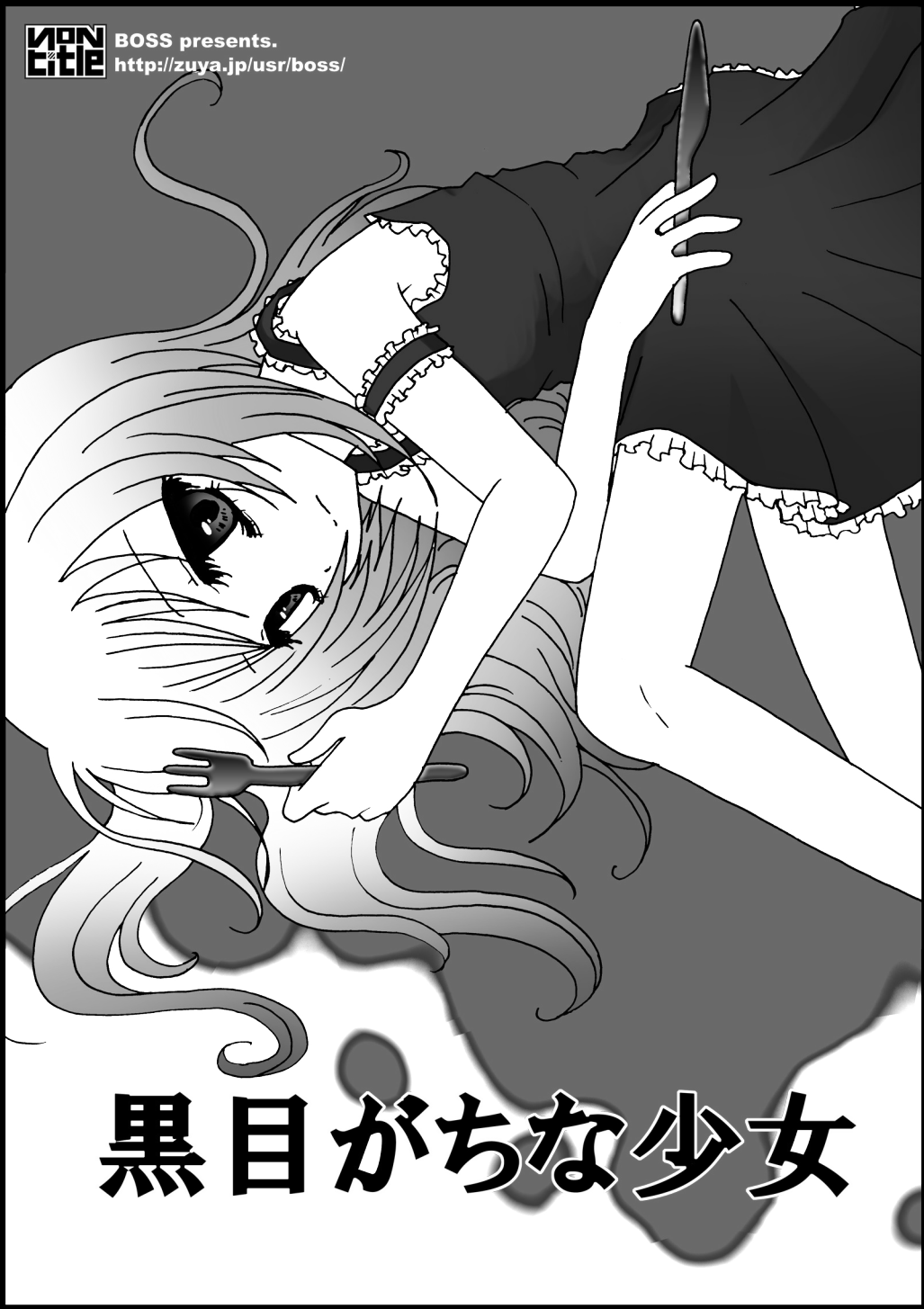
後で聞いた話だが、姉は教科書を盗った奴が家の前で遊んでいる所を捕まえ、何度も何度もそいつを殴り、教科書を無理矢理取り戻した。事なかれ主義の両親は姉の言い分を聞かず、姉と僕を連れてそいつの家に謝りにいった。そのことでますます両親のことを軽蔑した。

十二歳の時、両親を交通事故で亡くした。特に悲しくはなかった。僕にとって両親はどうでもいい存在だったからだ。姉は既に銀行の内定が取れており、保険金もかなり出たため、他の親類の力を借りずやっていくことができた。僕と姉は二人で生きていくことになった。このことは僕の姉に対する崇拝と姉の僕に対する庇護欲をますます強めるこのになった。

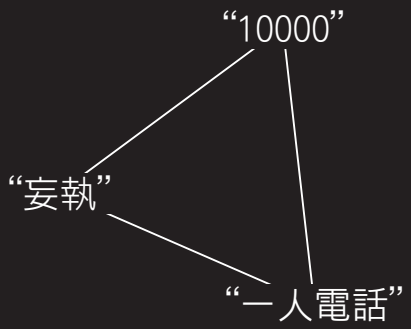
姉は銀行勤めになり、僕も中学生になったため授業時間が増え、姉と一緒にいる時間自体は短くなったが、姉の愛を感じなかったことはなかった。

僕の通った中学は給食がなかったため、弁当を持参しなければならなかった。生徒の多くはコンビニ弁当だったが、姉はいつも僕のために手作りの弁当を作ってくれた。姉の料理はいつも色彩豊かで僕の食欲を刺激した。どれもこれも、昨日のおか

好き好き
だぁい好き
狂おしいくらいに
あなたが――


BOSS presents.
http://zuya.jp/usr/boss/
黒目がちな少女

three-keywords-story
selected from the yandere community



ランドセルと懐中時計

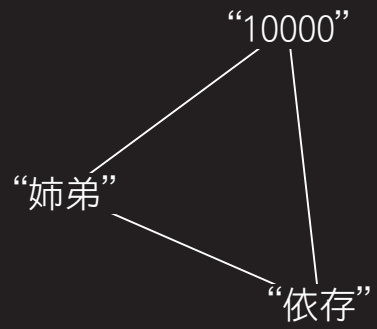
霧雨アリス

今日もつまらない授業が終わった。
私は教室の窓から、校庭で遊ぶ上級生達を眺めていた。開け放った窓から顔を覗かせる私の頬を、夕方の風が優しくなでる。
「あと、大体二十四時間……」
制服の胸ポケットから私は『それ』を取り出した。古くて小さな懐中時計。その針は現在が四時二十分であることを示していた。
最近は携帯電話で時刻が確認できる。それに学校には至る所に時計が設置されているため、生徒やその保護者達も、わざわざ時計を持ってくる必要性を感じていないのだろう。
私もそう思う。だけど、この懐中時計だけは特別なのだ。
目を閉じ、懐中時計に耳を当てると、何もない黒の世界の中に秒針が動く音だけが私に届く。
その鼓動をしばらく聞いていた私は、校庭でサッカーを始めた上級生達と世界を遮断するため、窓を勢い良く閉め、机の上の教科書やノートを、自分の赤いランドセルに押し込めた。

いつも歩く通学路。しかし少女の足取りは軽い。
腰まで届く、高級なカラメルのように艶やかに赤茶けたその美しい髪が、彼女の歩みに合わせて小波を次々と起こす。
彼女の背負った赤いランドセルの金具が、その足取りに合わせて、金属音を響かせた。
少女はしばらく歩を進めると、その場に立ち止まった。
そしてポケットから携帯電話を取り出すと、にっこり笑って耳に当てる。
「うん、明日だよね。解ってる。じゃあ体育館の裏で待ってるからね」
その後二言三言、言葉を交わした少女は、名残惜しそうに携帯電話を切ると、ポケットに収め、先程の会話を思い出したのか、またにっこりと思い出し笑いをした。

携帯電話を収めた私は、先程の電話を思い出しながら、幸せを感じていた。
あの日から毎日同じ時間にかかってくる電話。夏休みも冬休みもかかってくるし、平日は日に何度も電話がかかってくる。
彼は毎日、嬉しそうに話しかける私に、優しい言葉と声を届けてくれる。その声の主ためだけに私は今日まで生きてきた。何があっても、そう何があっても明日のために、明日と彼のために、私は惰性でただ生きてきたのだ。
ふと我に返ると、東の空は赤を失い、黒みを帯び始めた。もうすぐ日が暮れる。私は太陽が沈む様子をじっと眺め続けた。
西の赤もすぐに夜の黒に塗りつぶされ始め、空は夜の漆黒に包まれた。
私の足元の影も闇に消え、辺りの視界は色彩を失い、

three-keywords-story
selected from the yandere community



追憶の一万日

衛地朱丸

「お弁当はちゃんと持った？　時間は大丈夫？　ほら、襟が曲がってるわよ。ほんとっ、依樹は私がいないとダメなんだから！」

軒先でいつものように紫苑姉さんの小言が響き渡る。もう俺も姉さんもいい年だっていうのに、このやり取りは何年経っても変わらない。

「はいっ、ちゃんと直ったわよ」

「ありがと、姉さん」

俺は姉さんにお礼を言うと、鞄を引っ下げて家を出ようとする。

「依樹、仕事が終わったら寄り道なんかしないで早く帰って来るのよ！」

「分かってる！」

再三注意を促す姉さんに辟易しながら、俺は職場へと向かう。

幼い時に母親を病気で亡くしてから、姉さんは家事全般を行うようになった。俺はそんな姉さんに甘えに甘え、今に至る。

大学は家から通える距離にある地元の大学に通い、卒業後も地元の市役所に勤めることになった。大学くらいは家を離れようと思ったのだけど、「ちゃんと一人暮らしできるの!?」と散々姉さんに問い詰められ、結局断念した。今まで姉さんに頼り切っていたために、俺の生活能力は限りなくゼロに等しい。

同様の理由で、就職も遠方に転勤する必要がない市役所勤務という選択肢しかなかった。まったく、姉さんに依存しまくった生活がこんなにも自分の人生の足枷となるなんて、幼い頃は想像もしなかったな……。

「お、おはようございますっ！　ほっ、本日からこの職場で働くことになりました白咲薺と申します！　はっ、八ヵ月という短い期間ではありますが、よっ、よろしくお願いします!!」

就業の十分前に役所に着き、ＰＣの電源を入れつつ仕事を始めようとしたら、張り詰めたぎこちない口調で挨拶する女性の声が職場に響き渡った。

オカッパ頭の髪に地味目な緑色のスーツを身に纏った女性。今日から我が部署で臨時職員として働くこととなった、白咲という女性だ。確か短大を卒業したばかりの二十歳の女性だったかな。

「蒼杜さん、頼まれていた書類の作成、終わりました～～」

午後の三時過ぎ、コーヒーを口にしながら自分の業務に専念していたら、疲れ切った顔で白咲さんが書類を持って来た。

「ありがとう。どう？　仕事の方は大変？」

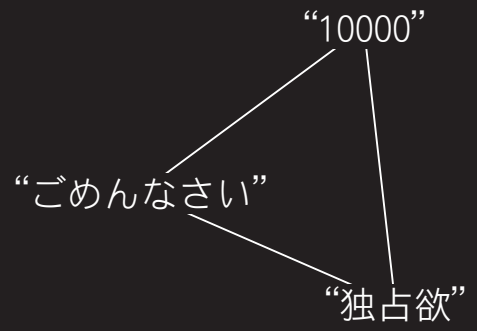
「い、いえっ！　だ、大丈夫です！」

「俺に遠慮しなくていいよ。君の正直な感想を聞きたいんだ」

「はい……実は結構いっぱいいっぱいですぅ。私にもできる簡単なお仕事だと思ってたんですけど」

「白咲さんは確か、短大卒業したばかりだっけ？」

three-keywords-story
selected from the yandere community



ぼくの世界

めーじゅゆらと

いつものように
仕事を終えて
いつものように
車に乗り込む。

いつものように
家路について……
あ、でも今日は
ちょっと寄り道。

それから
いつものように
マンションの階段を
駆け上がれば

そこに
あるのは
ぼくの家。

小さな
小さな
ぼくの
世界。

ほら
マンションの扉を
開ければ

ぼくの彼女が
料理を作る手を
止めて振り返り

「お帰りなさい」
って……

みいう～

——訂正。

幻覚

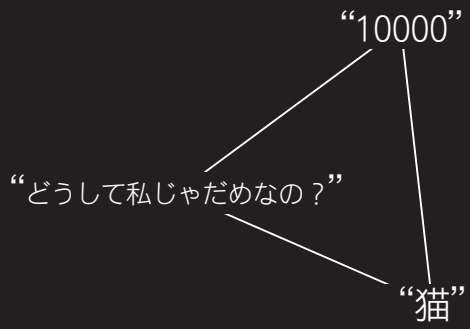
みう？

幻覚

ぼくの彼女は、
ブラにショーツだけ
というありえない姿で
ぼくに「みいう～」と
挨拶した。

three-keywords-story

selected from the yandere community



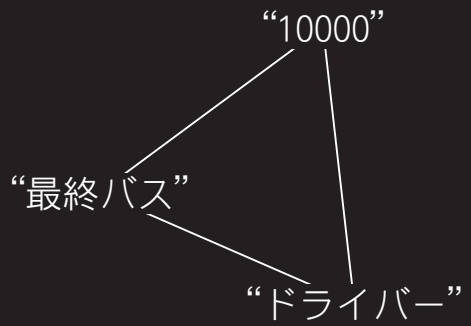
なんて素敵なヤンデレラ!!

利一

「人はみんな歪んでる。そもそも人とはそういうモノだ」
って誰かの話をたまたま聞いた時、わたしは何だかホっとした。
難しく言えば「天啓を得た」という事なのだろう。
ホっとした理由は二つ。
歪んでるのはわたしだけじゃないんだって事が一つと、あいつらが正常じゃ無いんだって事が一つ。
だから、それ以来わたしはわたしを肯定する事にした。
だって、否定したら自殺するしかないから。
それに何より――
――希望を口にする人が多いのは、世界の底辺が絶望だからなのだし。

『今日はこの辺にしましょうか♪』
『ですね。レベルも上がったし、そろそろ一時だし』
時計に目をやると零時四十五分を回った所だった。
『そろそろ寝た方がいいかもです。私も会社だし、凛さんだって学校でしょうし』
『うん。じゃ、これラストで』
パーティー内会話を示す紫の文字が更新されるのとほぼ一緒に、湧き上がって来たゾンビ達がこちらに向かって来て、僕達は当然応戦。
もともとレベル上げ目的で入っているダンジョンなので、勝負はそれまでに何度も行ってきた通り短時間で速やかに決していた。
『じゃ、オチますか』
『はい、あなた♪　なんてねw　またね、拓也さん』
『えぇ、またよろっすw　凛々さん』
『前から言ってるけど、２人ＰＴでの会話くらい「美咲」でいいのに』
『ま、さすがにそういうワケにもね（汗）』
いつものようにそんなやり取りをしてゲームからログアウトする。
オンラインゲーム（ネットゲーム）。
インターネットの普及＋２４時間使い放題に伴って開発された新しいゲームスタイル。平たく言うならインターネットでプレイするゲームで主にテーブルゲーム（麻雀、囲碁ほか）やレースゲームやＲＰＧ。最大の特徴は全てのキャラの背後に必ず各自プレイヤーがいる事。
従来のゲーム……例えばドラクエなんかでは自分は勇者で、後は武道家や魔術師や色々。でも、指示は全員に出さないといけない。
それはゲームだから当然なんだけど、やっぱりキャラはキャラなんだから独立した知能で動いた方がより本質に近い。
そもそも一人の人間がパーティーにいるキャラ全ての行動を

three-keywords-story
selected from the yandere community



病みバス最終便

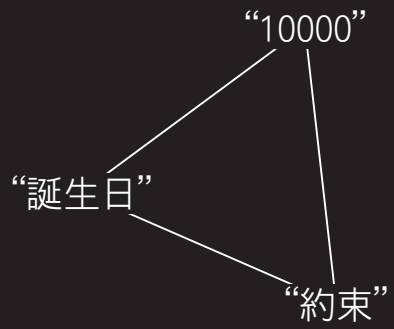
漫遊

ここはとある街のとあるバス会社の営業所。まだ若いのに男だらけの職場であるため、普段女性に縁のないバスの運転士たちが今日も取り止めもなく女性に纏わるムダ話にああでもないこうでもないと花を咲かせている。

「彼女ほしいなー」
「そうだなー。この仕事してるとホントに女と縁がないからなー」
「そういやお前らどんな人がタイプなんだ？」
「え？　俺？　そうだなぁ、この際だからもう贅沢言えないからなー。例えば……」
「例えば？」
「目が二つあって、鼻が付いてて、口があって耳が顔の両脇にあって……」
「当たり前だ！　なけりゃ化け物じゃないか！　お前は？」
「そうだなあ、俺は小柄な子がいいな」
「ふんふん」
「年下で」
「ほうほう」
「無邪気で幼い感じがして」
「なるほど」
「紅いランドセルと黄色い帽子が似合うかわいい子がいいな
あ」
「犯罪だっ！　お前は？」
「俺は女なんかいらない」
「またそういう強がりを」
「いや本当にいらない。俺は女も金もいらないんだ」
「ほーう」
「金もいらなきゃ女もいらぬ～、あたしゃもう少し背が欲しい～」
「古いよ！　古過ぎて誰も分からないじゃないか！　ホントロクな奴がいないなぁここには。だから女に縁がないんだよ…。お前は？」
「俺はあれだな、今ブームのヤンデレってやつがいいな」
「ヤンデレ？　何だそれ？」
「ああ聞いた事ある。あれだろ？　相手を好きになりすぎてどんどん病んでいってストーカーになったり刃物振り回したりするっていう…」
「おいおいマジかよ、そんな物騒なもんが好きなのかお前は？」
「ははは、分かってないなァお前は。そのくらい真剣で情の厚い女が本当に魅力的な女なんだよ。今の女はどいつもこいつも軽い奴ばかりでいけないよ。ヤンデレっていうのはそれだけ一途だって事だろ？　いい事じゃないか。俺はそういうかわいいヤンデレっ娘に死ぬほど愛されてみたいもんだよ」

three-keywords-story

selected from the yandere community



輪環

有栖山葡萄

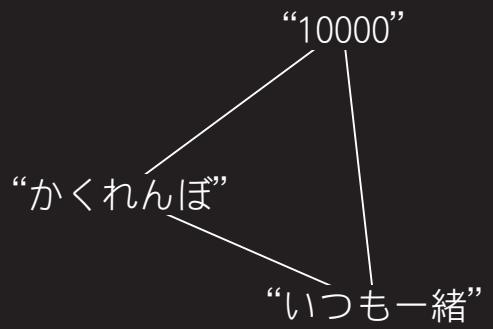
四月十九日　(Day -1)

明日になれば、楽しい素敵な事が待ってる。
そんな期待にドキドキしてなかなか眠れない。
誕生日がただ嬉しいわけじゃない。
明日の誕生日は、きっと特別な日になるから。
物心がつく前からずっと、朋矢（ともや）とは一緒に誕生日を過していた。隣り合う二つの家のどちらかで、家族揃ってお祝い。私が一歳の時から続いているって話だから、二人合わせて十九回目。
明日は私の十回目の誕生日、朋矢より先に大人に近づく。
だからちょっと勇気を出してみた。
私からのお願い。お昼は二人で一緒に出かけようと、デートしてプレゼントを買って欲しいとお願いした。彼は照れながら「いいよ」と言葉短く返事をくれた。素直に嬉しかった、でもちょっと物足りなかった。デートって言葉の意味をちゃんと判ってるのか、不安と不満の混ざった表情で彼を見つめた。
なにを言って欲しいのか、そんなの一言に決まってる。
今まで二人の間で、一度も交わされる事の無かった言葉。
「明日まで待ってくれる？」
朋矢が真っ赤な顔で、だけど真剣な目で答えてくれた。
今はそれで十分だった。
明日は素敵な一日になりそう……

九月七日　(Day X)

「おめでとうございます。元気な男の子ですよ」
分娩室に、いま生を受けたばかりの赤子の産声が響く。
これから私に温もりとやさしさを与えてくれる、彼が生まれた瞬間だ。

three-keywords-story
selected from the yandere community

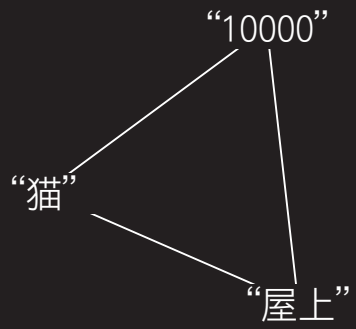


幼き日のままに

七曜

昭和中期。終戦後、戦後復興をはじめたばかりの日本国内のとある小さな村。
疎開先にもならず、ただずっと戦前から変わらぬ姿を残しているほどに目立たない小さな村。
「もおいいかい」
「まあだだよ」
そんな中で、幼い少年と少女の声が時々鳴く烏の声に混じって聞こえる。
少年のほうは大樹といった。
少女のほうは千秋といった。
どちらも年齢の割には小柄な子供たちだった。
「もおいいかい」
「もおいいよ」
日は沈みかけ、茜色に染まった空にぽつりぽつりと小さな家々のシルエットが見える。
そして、この村の神社の境内にも人型のシルエットがひとつ。
かくれんぼの鬼になっている千秋がちょうど自分の顔に当てていた手を離し、立ち上がった。
「大樹君、どこかなー……」
千秋が神社の砂利を踏みしめながら大樹を探し始めると、それに合わせるようにひぐらしがカナカナカナ……と寂しそうに鳴いた。その音は蒸し暑い夏の境内の体感温度を少しばかり下げる。
「……」
じゃっ、じゃっ、じゃっ、じゃっ、じゃっ
「……」
じゃっ、じゃっ、じゃっ、じゃっ
薄い草履で歩き回るうちにだんだんと足の裏が痛くなってくる。
「……」
じゃっ、じゃっ、じゃっ、じゃっ
どれだけ歩いただろうか。もうとっくに太陽は沈み、空にはぽつりぽつりと星が見え始めていた。
まだ空が薄明るい中で小さく白く光る星の数を数えながら歩いていると、千秋は段差に躓いて転んだ。上ばかり見て歩いていたのだから足元がお留守になるのも無理はない。
「う……うえぇ……」
見ると、膝を擦りむき、破れた皮膚からは血が滲んでいるようだった。
「痛いよ……痛いよお……」
千秋は立ち上がることもせず、ただずっと「痛い」と繰り返しながらその場で泣いていた。
「千秋ちゃん……どうしたの？」
しばらくして、千秋がいつまでも自分を見つけないことに不審を抱いた大樹が境内に出てくると、千秋はまだその場で座り込んでいた。

three-keywords-story
selected from the yandere community



泪月（おぼろ）

辛枝

最初に、お断りをしておかねばならない。このインタビューは、あるロックミュージシャンの長い独白を収録したものである。独自の哲学に基づいた骨太なロックで、本邦の音楽シーンを席巻し、あるとき忽然と姿を消した彼の行方について、これまでさまざまな憶測がなされてきた。しかし、彼自身の言葉でその理由が語られたことはなかった。

彼は、郊外のとある病院の一室で、静かに日々を過ごしていた。現世の無常を、世俗の愚かしさを拳で殴りつけるように、激しく歌い続けていたころよりもはるかに痩せ、落ち窪んだ頬の陰が、彼独特の頽廃的な印象をさらに濃いものにしていた。

これまで、禍々しくも華々しい伝説で彩られてきた数多くのスターがいる。セックスや暴力、酒、クスリ、犯罪――しかし彼に起こった出来事は、そのどれにも当てはまらない。もっと普遍的な、人間の根源に潜む「ひずみ」が、彼に、悲しい疵を残しているように感じられた。

そして僕は――数時間に及ぶ長いインタビューを終え、テープを文字に起こしている最中も、そして、この原稿を書いている今も、彼が語ったことを、世間に向けて公表してよいものか悩み続けている。というのも、その内容があまりにエキセントリックであり、一介の音楽ライターである自分の手にはとうてい負えるものではなかったからだ。

だから、彼が語った言葉を何の脚色もなく（多少の整理はしているものの）、ありのまま書き記すことにする。プロ失格と思われてもいい。この長いインタビューの真偽をどう判断するかは、読み手に任せようと思う。

＊

……へえ、物好きな雑誌もあるんですね。
これってもう回ってるんですか？　テープ。ああ、はい。
ほら自分はもうこの通り、歌いたくても歌えない状況で。
歌いたい、と思うことですか。ありますよ。
でもだめなんですこれが。――歌えない。
俺はね――猫に魅入られてんですよ。
猫は猫ですよ、ニャアってなく、あの猫。
どういう意味かって？
まあ、死期の近い狂人のたわ言と思ってください。
……聞きたいんですか？
あなたも物好きな人だね。
あの――金華の猫って知ってますか。
中国の伝説なんだけど、妖かしの一種でね。
金華の猫は、屋根の上で月の精気を吸い、美しい人間に化けるんです。その猫に魅入られた人間は、正気を失って、終いには――死んでしまう。
治らないのかって？
原因の猫の肉を食えば、正気に戻るらしいんだけど――。

萌え属性「ヤンデレ」その発見と流行の歴史

Introduction

序

Citation

／ Wikipedia

ヤンデレとは「病み」と「デレ」の合成語であり、広義には精神的に病んだ状態にありつつ他のキャラクターに愛情を表現する様子をいい、狭義には好意をもったキャラクター（「デレ」）が次第に精神的に病んだ状態になることをいう―― Wikipedia (as of 2008/04)

―― 2008 年現在、オタク界で最も勢いのある「萌え属性」の一つと言ってよい立場にある「ヤンデレ」。細々と同好の士で語り合っていた発生初期から愛好している身としては、ここまで一般に広がる様を目の当たりにすると、まるで箱入りで育てた愛娘が知らない男の元に嫁いで行くみたいな気分になってくる。無論、別に自分だけのモノでもなんでもないのだが……。

……と、古株の愛好家ぶるだけでは益は無い。しかし今回、そんな古参ゆえに出来る事があるのではと思い立ち、萌え属性「ヤンデレ」が発見・定義され、流行していく過程を全 9 部にわけまとめてみた。取り上げたほとんどの出来事にリアルタイムで遭遇し、例としてあげた作品をことごとくプレイし、鑑賞し、読んだ事がある身ならではの視点が本稿に現れていれば幸いである。

文：a-park

Side-Side Material
YANDERE HISTORIES

Before the Goddesses

1:「ヤンデレ」前史

「ヤンデレ」という概念（属性）が発生する以前から、そこに分類されているキャラクター達は世に存在していた。

恋愛感情の暴走の結果として狂気・凶行に至る女性というのは古来より存在するキャラクター類型であり、それが「ヤンデレ」という属性が発明されたことによって再発見と再定義が行われたということであろう。

原点を辿れば神話や古典文学に行き着く（例えば「六条御息所はヤンデレ」など）とする言説もある以上、キャラクター的な意味での「初出」を求めることに意味はないと筆者は考える。

Into the Madness

2: 狂気系キャラクター熱の高まり

2004 年の夏、オタク界を席巻した作品である「ひぐらしのなく頃に」。

この頃はまだ「ヤンデレ」という概念は存在しなかったが、本作品における竜宮レナ・園崎魅音の両名のストーリー後半での豹変した姿は「狂い系ヒロイン」とでも言うべきものを広く一般に知らしめることなった。

2005 年の春（4/28）には後に「ヤンデレ」の代名詞となる「School Days」が発売されている。

本作の「鮮血の結末」「永遠に」等の衝撃的なエンディングは、「ヤンデレ」キャラクターの「病んだ」末の所行の代表例として扱われている。

なお、意外な事だが「School Days」発売当初はこれらの所行を指すにあたって「ヤンデレ」と言う語を使用するユーザーは殆ど存在しなかった。ある意味では本作も「ヤンデレ」発明後に改めてカテゴライズされた存在と言えるのかもしれない。

これらにより「狂気に侵された美少女」というキャラクター設定がオタクコミュニティ内で親しまれるようになり、一部の先鋭的な者からは「その病みっぷりが萌える」という意見すら出るようになっていた。

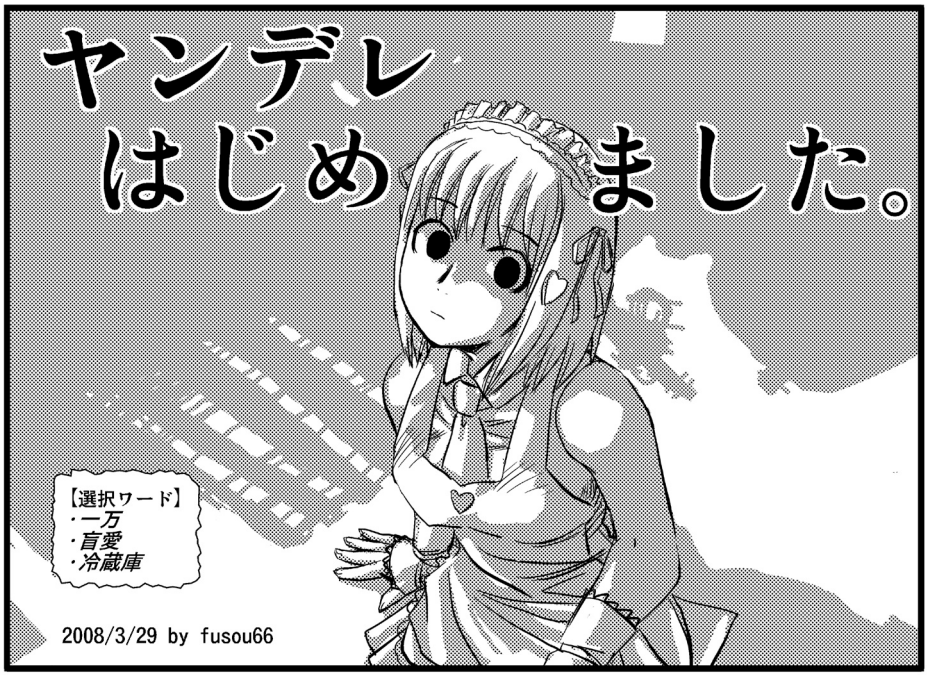
これは 2005 年秋（9/21）には mixi に「狂いっ娘大好き」コミュニティが発足していることからも窺える。「ヤンデレ」の誕生とヒットの下地はこの頃に作られたと言ってよいだろう。

Yami-Genesis

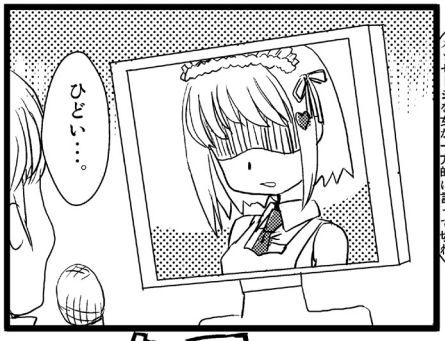
3: 誕生

「School Days」の衝撃もさめやらぬ 2005 年の夏。

後に「空鍋」で有名となる SHUFFLE ！ 19 話放映時の 2ch アニメ板実況スレッドの中での例が、今のところ確認できている最古の「ヤンデレ」の使用例である。


ヤンデレ
はじめました。
【選択ワード】
・一万
・盲愛
・冷蔵庫
2008/3/29 by fusou66

ねぇツトム君♥
どうしてメールにお返事くれないの？
昨日だって一万通は携帯にメール出したのに一件もお返事くれなかったよね…。ううんそれはイイの、ツトム君メールが苦手で照れ屋さんだって知ってるから。でも、電話にも出てくれないよね？どうして？昨日一万回くらい電話したんだよ？そしたら、お客様のご都合により電話に出ることが出来ません」って変なメッセージを女が一方的に言って切れ


ひどい…。

レーコちゃん
本当に、そういうの
止めてほしいんだ。
仕事中、キミに
何度か微笑んだけどあれは
「営業スマイルを忘れてるよ」
って言いたかっただけで…

酷いよ！
ツトムくん！
私の体を散々
弄んで置きながら!!
クワッ
なにデタラメな
アテレコしてんだッ
コラーッ!!